

Contents

- ご挨拶 …… 神戸大学都市安全研究センター 田中 泰雄 3p
- はじめに …… 神戸大学 岩田 健太郎 5p

第1部

復習と勉強 編 おさらいレクチャー

- インフルエンザ診療の基礎知識 …… 神戸大学 大路 剛 8p
- インフルエンザと感染管理 …… 神戸大学 李 宗子 14p
- サーベイランスを振り返る …… 国立感染症研究所 具 芳明 18p

第2部

振り返り 編 リスコミ・プレイバック

- 臨床現場におけるリスコミ …… 神戸医療センター中央市民病院 林 三千雄 34p
- 地方行政におけるリスコミ …… 神戸市保健所 白井 千香 42p
- 日本のリスコミ、世界のリスコミ …… 近畿医療福祉大学 勝田 吉彰 50p

総合討論 1 58p

「2009年のパンデミック、リスコミ的に振り返ると…」

司会：岩田 健太郎 特別ゲスト：神戸女学院大学 内田 樹

第3部

アップグレード 編 明日からどうする？

- コーチングとコミュニケーション …… ビジネスコーチ 佐々木 美穂 76p
- リーダーシップとは何か …… 岩田 健太郎、洛和会音羽病院 土井 朝子 84p

総合討論 2 99p

第2部 振り返り編 リスコミ・プレイバック

日本のリスコミ、 世界のリスコミ



勝田 吉彰

(Yoshiaki Katsuda)

近畿医療福祉大学社会福祉学部 臨床福祉心理学科教授

京都生まれの精神科医師。

国内の大学病院・一般病院で臨床医として勤務後、英国オックスフォード大学精神科教室に留学。帰国後臨床医を経て1994年外務省に入省。アフリカ・欧州・アジアの日本大使館および医療現場勤務で24カ国を渡り歩く。2006年に中華人民共和国日本大使館参事官兼医務官を最後に外務省を退官し、現職に至る。

2003年北京ではSARS流行に遭遇してうわさで市民がパニックになるさまを目の当たりにし、新型インフルエンザの及ぼす心理社会的影響に強い関心を持つ。ブログ「新型インフルエンザ・ウォッチング日記」、ツイッター等で情報提供を続けており、リスコミに関する情報も充実！

著書に『ドクトル外交官世界を診る』（星和書店）等。

1

生活者から見たリスコミ

北京から ……………

まずは私が取材し、知り得た「リスクコミュニケーション（リスコミ）される側の人たち」について、2つの都市の話をします。

最初は北京市です。一般市民に対するリスコミは中国衛生部(日本の厚生労働省にあたる)のスポークスマンが情報発信をしていました。おもしろいのが「短信」という携帯電話のショートメールの利用です。中国では国家や地方政府、公安などが伝えたいことを国民の携帯電話に一気に送ることができる仕組みがあるようで、そのシステムを使って一斉に情報配信することが行われています。これはさらにGPSと連動していて、実際にある人が北京空港の近くを通ると「あなたは健康ですか？」というメッセージが送られてきたということもありました。

2009年の新型インフルエンザ(A/H1N1)の医学的なことに関しては中国における呼吸器疾患研究の第一人者である鍾南山(ツォン・ナンシャン)氏(広東大学教授、現 中国工程院院士・中華医学会会長)のグループが、学会発のスポークスパーソンとして機能していました。

また、マスコミ対応については、かの国のマスコミは「マスコミは政府の喉である」と言われるほど統制がとられていますので推して知るべしですが、国家に都合の悪いことは公にならないという一方で、医療スタッフのモチベーションを高めるために活用されることもあり、良い側面もあったのではないかと思います。

医療関係者に対してはパンデミック(H1N1)2009の前から「鶏流感(鳥インフルエンザ: H5N1)」対策が積極的に行われていました。北京市では全医療機関に通達が行き、各医療機関から主治医というランク(日本というと専門医になったばかりとか大学で助手になったくらいの中堅医師)以上の医師を招集して、新型インフルエンザ(A/H1N1: 重症甲型流感)についての講習が行われました。その後試験が課されるということで、当事

者はかなりのプレッシャーを受けていたことを知人の話から窺い知りました。私もその講習の内容を見ましたが、疫学、疾病の基礎知識、予防方法、公衆衛生、重症者への対応、海外のデータ、典型的な症例報告など……極めて常識的なものでありながら呼吸器専門医でない医師にも理解できるよう工夫されたものだと感じました。

次に北京に住んでいる日本人に対しては誰が何をしたのかということです。これは在中国日本大使館の医務官や総務公使、厚生労働省から出向の領事部員らが中心に、H5N1警戒時期から日本人会、商工会、日本人学校等をまわり講演を頻回に行いました。

当初は、なかなか関心を示されなかったのですが、初めて北京市民でH5N1での死亡者が報告されたあたりから一気に日本人社会の関心が向くようになったということです。逆に大使館が煽動したということと言う人もおり、リスコミの評価は分かれる面もありました。参考までに、2003年のSARSの時にはどうだったかということをお話ししますが、実は、当初は肝心なデータが政府によって隠蔽されていました。実際には北京で400人の感染者がいるにもかかわらず「今日の患者数は10人です」とか「15人です」と発表していたわけです。しかし、ある病院の医者が“TIMES”に内部告発をしたことから国際社会からの圧力が加わり、後日真実が公表されたものの、逆に社



中国衛生部にて

会不安は拡大しました。前半はこのような混乱状態でしたが、後半に衛生部のスポークスマン(日本でいう厚生労働省副大臣相当)が一貫して状況を発表するようになってから沈静化したということです。その際には在住の外国人や各大使館に向けても感染時の外国人専用収容病院の情報などさまざまな情報が提供されたということでした。

このようなときにはさまざまな噂が流れるものですが、中国ではご存じのとおりメールの監視システムがありますので、悪質メール発信者は逮捕拘束するというくらい徹底的に流言飛語を阻止したようです。

パリから ……………

さて、次はパリの話です。フランスは、保健省の担当者がテレビ、新聞等への情報発信をしています。ただ、私が取材した人はその情報の確度は低から中度とっており(あくまでもその人の主観ですが)、ワクチンの必要性和効果についてはまさに百家争鳴状態で、専門家によって全く話が違うということでした。実際にはワクチン情報は地方自治体(区や市町村)レベルで提供し、ワクチン接種対象となった幼児・高齢者などの高リスク群に対しては、接種場所や日時などが記載された手紙が郵送されたそうです。ただ、フランス人は飽きっぽいのか、最初はワクチン接種に殺到していたけれどもだんだん受けない人が増えてきて、そのうち接種会場がガラガラになっていったという証言もあります。もう一つ、国民性として常に「なぜ?(Pourquoi?)」と疑うという性質があるので本能的に政府の見解は信用しない。そして必ず自分の頭で何か解決策があるのではないかと考えるので、パニックになりにくいのではないかと思います。

実際にSARSのときもそうでした。あのときも北京で一番パニックを起こしていたのは日本人とアメリカ人でしたが、フランス人は非常に落ち着いていて、当時、医務官仲間と話をしてもフランスの大使館の医務官は、日米の医務官に比べると苦勞が少なく見えたものです。

総合討論 1

「2009年の
パンデミック、
リスコミ的に
振り返ると…」

司会

岩田健太郎

神戸大学

林 三千雄

神戸医療センター中央市民病院

白井 千香

神戸市保健所

特別ゲスト

**内田 樹**

(Tatsuru Uchida)

神戸女学院大学教授・思想家・エッセイスト

具 芳明

国立感染症研究所

大路 剛

神戸大学

勝田 吉彰

近畿医療福祉大学

専門はフランス現代思想、映画論、武道家としての顔も持つ。『日本
辺境論』（新潮新書）、『街場のメディア論』等々、著書、翻訳書も多数。

岩田 健太郎(司会) 李さんは緊急の用件で参加いただけませんでしたが、演者の先生方と、特別ゲストの神戸女学院大学の内田 樹先生に壇上に上がっていただいています。早速ゲストの内田先生にコメントをいただきたいのですが、2009年の新型インフルエンザに関する報道を受けて、どういった感想をお持ちになりましたか？

内田 樹 あまり覚えていないんですが、誰かが「うろたえるな!」とか、橋下知事が大阪はパニックになっているとか言っていたのですが、パニックになんかになってないよ……って(笑)。みんながマスクをして、外出を控えて、神戸のセンター街がガラーンとしているのを見て、

「なんて言うことを聞く市民なんだろう、こんなにコントロールされる市民がパニックになんかなるか?」とか、そんなことを思っていましたね。

岩田 ありがとうございます。では、今日のレクチャーを受けて、会場のほうから、これは聞いておきたいというご質問、ご意見がありましたらどうぞ。



医療機関、行政との連携をどう進めるか？

フロア 今日は素晴らしいお話をありがとうございました。早速ですが、病院間の連携もしくは行政との連携を平時から相当していないと、いざ問題が起こったときに対応が難しいというお話がありましたが、そのような連携をとっていくためにどういうアプローチをするのがよいとお考えでしょうか。

林 三千雄 神戸が必ずしもうまくいっているわけではありませんが、インフルエンザはアプローチの一つの方法であって、他にも行政が比較的積極的にかわってくれる感染症対策、例えば結核などはわれわれにとっても非常に大事な問題ですし、行政のほうもデータがほしいはずですから、そういうものをきっかけに接触していくといいのではないかと思います。

実は、われわれも神戸市保健所とは新型インフルエンザ対策をきっかけに連携が始まったのですが、保健所からはなるべく現場に近い立場の方に参加していただく、というのが医療機関の状況を分かってもらうためにもよいのではないかと思います。まず現場の皆でプランを立て、そのプランを組織の上にあげていって可決してもらう、というのが理想的でしょうね。

それから、医療現場同士ですが、これはよくある製薬企業主催の研究会の感染症対策や勉強会などを

活用して、主催したり演題を出し合ったりして交流していくという方法があります。そうして仲間ができ、だんだん大きなグループになってくると保健所も本気になってくれます。神戸市新型インフルエンザ対策病院連絡協議会も、組織が小さい頃はまったく相手にしてもらえませんでした。資金も権限もありませんから、「どういう権限でそんなことを言っているの?」と。しかし、プランも細かいところまで練られ、参加する病院数が増えくると、今度は行政のほうも無視できなくなってきました。そこにオブザーバーとしてでもいいので、行政の方に話を聞きに来てもらうというところから始めればよいのではないかと思います。

岩田 白井先生、保健所の立場からいかがでしょうか。

白井 千香 今、結核というお話がありましたが、私自身結核対策に関わっていたことがありますので「なるほど」と思いました。他にエイズ対策などにも関わっているのですが、病院だけではどうしてもやりにくい部分もあると思いますので、そこをつないでいく役割を行政がすべきだろうと思っています。今回の新型インフルエンザでは、ひとつの場で顔を見合わせて話をするというチャンスがあったことが大きかったと思います。